パビリオンが 1年間成長し続ける 史上初のネット上の博覧会

日本型ＩＴ（情報技術）社会に向けて、政府では様々な施策を展開しています。このような中、平成12年12月31日から来年2001年の１年間、インターネット上の博覧会――通称インパクが開催されます。これまでの博覧会とは違い、インターネット上につくられたバーチャルなパビリオンを見て回り、参加するイベント。どのような博覧会なのか、藤岡文七・内閣総理大臣官房新千年紀記念行事推進室長に話を伺いました。

内閣総理大臣官房
新千年紀記念行事推進室長
藤岡 文七

インタビュアー
青山 佳世

自治体・企業・ＮＰＯなど二百を超えるパビリオン

青山　今年の十二月三十一日から二〇〇一年の一年間、インパク――インターネット博覧会が開かれます。通常、博覧会といえば、会場のゲートから入るといくつかのパビリオンがあって、そこを人々が見て回るという形ですが、インパクはちょっと趣向が違うわけですね。

藤岡　そうです。通常の万国博覧会とは違い、インターネット上に展開する博覧会です。

昨年の十一月に、小渕前総理、それから、堺屋大臣――インパク担当大臣ですが、このお二人が、これからはインターネットの時代だから、これを使って新千年紀の記念行事として何か面白いことはできないか提案されたのが始まりです。

トヨタ自動車の奥田会長に座長をお願いし、「新千年紀記念行事懇話会」をつくっていただいて、行事の内容を議論していただきました。その議論の中でコンセプトも、変わっていきました。当初は地域が主役の時代というのが小渕前総理と堺屋大臣の発想でしたが、懇話会で議論を重ねるうちに、

青山さん●今までの博覧会とリンクさせて考えようとするから無理があるのですね

博覧会というよりも、運動会と見ていただいたほうがいいかもしれません●**藤岡室長**

地域が主役といっても、ネットの時代はみんなが参加するのだから、企業、ＮＰＯ（民間非営利団体）、個人などがどんどん参加するような形でなければいけないということで、構想がどんどん大きくなっていきました。

青山　そうですか。

藤岡　今の段階でインパクの姿がどうなっているかと言いますと、一年間特定のテーマを掲げてサーバー上で展開するサイトを「特定テーマパビリオン」と言っていますが、募集の結果、それが最終的には二百を超える勢いになっています。それ以外に自由に参加していただくものに「自由参加パビリオン」があります。大きく分けてこの二つのパビリオン群があります。

インパクを主催するのは政府ですが、特定テーマパビリオン群での主役は二百の特定テーマパビリオンすべてです。一年間、いろいろなテーマを掲げたウェブサイトをみんなで育てていく、みんなでネット上の街をつくるという発想で、今、開会に向け動いています。

自由参加パビリオンは、ネットの特徴を生かして自由にいろいろなテーマやタイトルを掲げて参加してもらう、「我と思わん者は出でよ」（笑い）ということで、いろいろな文化を背負った各界の人たちに自由に出ていただこうという趣旨のものです。

インパク広場で多様に成長するサイトを案内

青山　通常、地上で行われる博覧会の場合には、ここからここまでが博覧会の会場ですよというエリアが決められていますが、インターネット上だとその区分けはどうなのですか。

藤岡　その入口（ポータルサイト）を、我々「インパク広場」と言っています。それをどのようにしていけばいいか、「インパク編集部」を設けて、糸井重里さん、荒俣宏さんなど、文化を担っているそうそうたる方にお願いして、これからのネット社会においてみんなが集まれる広場、また、いろいろなサイトを案内するような技術も含めて検討していただいていて、これからつくり上げようというところです。

青山　十二月三十一日がいわゆる開会になるわけですが、インパク広場というのが今まさにつくられようとしているわけで

すね。

藤岡　おっしゃるとおりです。インパクトは、開会式のときはまさに出発点なのです。一年間やっていくうちに、中がころころ変わっていくと思いますね。各パビリオンが、ああでもない、こうでもないと内容を編集しながら、それから、いろいろな人々に呼びかけて投書、投画と堺屋大臣は言っていますが、投書、投画を求めながら、途中で、あ、こっちのほうがいいとなれば、そっちの方向へどんどん変わっていくでしょう。また、自ら得た情報をどんどん皆さんに披露してもらいたい。サイト自体が一年間どんどん成長していきます。

青山　増えていくということですか。

藤岡　そうです。サイトというのは、企業や店を運営するのと同じですから、今までのホームページのように、ぽんと出して、皆さん、勝手に見てくださいというのではなくて、いかに人にアトラクティブに　観(み)せる　かと同時に、いかに　魅せる　かというところが非常に問われます。そういう技術が、これからのネット時代は非常に重要です。

人を魅せる文化のあるところに人は集まります。そういう人を集めることが発展の一つのキーポイントだと考えています。その一番のお手本はアメリカですよね。アメリカはなぜあそこまで発展しているかと言うと、実態的にもバーチャルの上でも、いろいろな人間を集めているからです。それだけの人間の力を結集する魅力のあるところに、これからの発展はあるということじゃないでしょうか。

また、これはバーチャルな世界だけではなくて、いろいろな企業、ＮＰＯのテーマに関する実際のイベントにも積極的に結びつけて、ネットの社会がリアルな社会にどんどん影響を与える、また、リアルな社会からネットの社会に影響を与えるということをやっていこうということです。ですから、一年間、バーチャルなイベントのみならず、関連する様々なリアルなイベントが

藤岡 文七
(ふじおか・ぶんしち)

内閣総理大臣官房新千年紀記念行事推進室長。昭和２５年生まれ。兵庫県出身。５０年経済企画庁入庁。消費者行政第１課長などを経て平成１１年末から現職。

青山 佳世 (あおやま・かよ)

フリーアナウンサー。愛知県出身。NHK「こんにちはいっと６けん」に出演中。講演、執筆活動の傍ら、現在、運輸省・運輸政策審議会、文部省・大学審議会などの委員を務める。

出てきます。

だれでも参加できる自由参加パビリオン

青山　特定テーマパビリオンには、具体的にどのような団体が参加されているのですか。

藤岡　地方自治体では、東京都を除く全道府県、それから、政令指定都市のほとんど、そして、その他の自治体も含めて、パビリオン数として六十以上が参加します。あと、企業関係とＮＰＯを合わせて百四、五十が参加します。

　テーマは非常に幅広くて、図書館的な分類をすれば、全分類と（笑い）。

青山　あらゆるジャンルですか。

藤岡　それをどのように案内していくか、どのようなプレゼンテーションができるか、また、それぞれのパビリオンの設営者が意図していることをどう案内するかということを先ほど申し上げた「インパク編集部」で考えていただいています。

　大まかに分けて十幾つかのテーマになりますが、そういう大きな分類ごとにどうするか、各世代向けにそれぞれ分けるとどうなるか、もちろん検索みたいなものもつくりますが、いろいろなガイドの仕方があるだろうと思います。

　インパクでは、そういうガイドをする機能を使うだけではなくて、ガイドの過程も楽しんでいただく。ディズニーランドで言えば、真ん中にお祭り広場がありますよね。お祭り広場で景色は見えます。それぞれのゾーンに行けば、それぞれの世界の雰囲気があり、また、そのゾーンの乗り物の楽しみがある。そういう意味で、単なる無機質的な案内をするのではなくて、全体を楽しみの場にしよう、入ったこと自体が面白いと思われるような場にしていこうというのが、今回のインパクのねらいです。

青山　楽しそうですね。

藤岡　ですから、ネット上のお祭りですね。基本的にお祭りの精神で　魅せる　ことがどこまでできるかというところで力量が問われる。そういう文化をつくろうじゃないかということです。

　インターネットを使いこなすのが難しいということがある一方で、ｅコマースのネット上の問題点として、ｅコマースは怖いというイメージがあります。例えばｅコマースで情報を流せば、その情報が本来の目的以外に使われてしまうということが一部で言われています。でも、インパクではそのようなことはありません。皆さんが安心して楽しめる場とはどういうものかという実験の場でもあります。

青山　それには、いろいろなルールとか決め事なども必要になってきますね。

藤岡　まさにそういうルールを参加者の方にはきちんとお守りいただくということで、厳格なルールでやっていきたいと思います。そういう意味では、お子さんにも安心して見ていただける場にしていきたい。

青山　自由参加パビリオンの要領がホームページに載っておりまして、結構細かいことがいろいろ書いてあり面白かったです。

藤岡　いろいろ細かいことが書いてありますが、ざっと見ていただければ、難しいことは書いてないのですよ。役人流に言うとああいう言葉になるわけですが（笑い）。

　一言で言えば、常識的なことはきちんと守ってください、いわゆる公序良俗に反するようなことはしないでください、例えば、一ページ丸々広告に充ててしまうとか、そういうことはやめてください、体裁をそろ

えるために、ある程度の約束事を守ってやってくださいということです。それを厳しいと見るか、厳しくないと見るかですが、これは決め事なんですよ。

青山　そうですよね。

藤岡　インパク全体をよくするためには、それだけのルールをつくりましょうということです。

青山　自由参加したい方の場合、どのように申し込めばよろしいのですか。

藤岡　メール、ファクス、郵便、いろいろな手段があります。自由参加というのは、登録していただくということですが、ただ、約束事は守っていただきますということです。

青山　定員はないのですか。

藤岡　ありません。ちなみに、特定テーマパビリオンにも定員はないのですが、あまりたくさんになると、案内するのが難しいという面がありますし、あと、テーマがダブらないようにしています。

コンテストを実施し選ばれたサイトを表彰

青山　インターネットのいろいろな可能性を皆さんに競っていただこうということで、コンテストが行われて、表彰もあるとうかがっています。

藤岡　そうです。インパクは、様々な文化とか社会を背負っている方に出てきていただきたいという趣旨ですので、その点は積極的にやっていきたいと思っています。そこがインパクのポイントでもあります。

　表彰としては、総理大臣賞から始まって、関係大臣賞、パビリオン賞など、いろいろ考えています。

青山　大企業だと、お金をかけた高度なテクニックのすばらしい映像などをおつくりになるでしょうから、個人ではかなわないかもしれませんね。

藤岡　そこは、考え方が大きく分かれると思います。大企業系の非常に手の込んだ、プロフェッショナルなサイトと、ＮＰＯ系の様々な方が活躍するサイトと、二種類あると思いますが、インパクは展示会ではありません。万博は展示をしますが、我々はネットの街をつくろうとしているのです。

　テーマに関していろいろな興味を持つ人々が、ネットのそのサイトに集まっていただいて、新しいものをまたどんどんつくり出していく、そういう場所が必要だと思っているわけです。そういうことからすると、展示しているものがいいかどうかではなくて、何を生み出すかといったところが評価されるべきだと思っています。

青山　なるほど。

藤岡　これは別にネットだけじゃなくて、ネットの場を介して、またリアルな場をつくるわけですね。例えば、ロボットのテーマがあって、ロボットに関する大会をやるということになると、ロボットに関心を持っている人々が、ネットの中で、ああいうロボットはどうだ、こういうロボットはどうだ、あそこではこんなものをやっているけれども、これはロボットに応用できないかとか、そういうものがネットの中の一つの世界、ワールドを形成していくわけです。その中でいろいろな人たちが活動する。普通ですと、一つの街に集まらないとなかなかコミュニケーションがとれませんが、ネットの場合はそこである程度できる。実際、どこかにロボットの街ができたって不思議ではないわけですね。

　アメリカでは、知的な人々が集まるネットの社会ができると、そこにスタンフォー

ド大学ができるとか、そこにシリコンバレーができるとか、そういうふうに街ができているわけです。

日本はどうなっているかと言うと、渋谷にちょっとそういう地域がありますが、残念ながら幕藩体制なんです。おらが村さの、ということになる（笑い）。ネットはそういう社会を変えることにもなると思います。

青山　表彰とかコンテストはかなり難しそうですね。膨大な数のパビリオンが、スタートからどう発展していったかということを一年間追っていって、評価しなくてはならないということになりますと、相当審査は大変ですね。

藤岡　ええ。これも今、議論中ですが、いろいろな分野がありますから、審査があまり大変なんで、投票で決めようという意見が一番有力なようですね（笑い）。

青山　自薦他薦問わず……。

藤岡　投票制度にも欠陥があって、集団で投票するとか、何回も投票するとか、いろいろありますが、あまりおかしなものは排除するにしても、そういう単純な方式がいいのではないかと思っています。それも日本社会の一つの文化度を計る意味でよいと思います。

青山　今までやってないことにトライするというのは、道がないですから面白いですね。

藤岡　道がないから面白いという言い方もできますし、道がないから何をやっとるんだという言い方もできます（笑い）。

青山　今までの博覧会とリンクさせて考えようとするから無理があるので、インターネットで行われる全く新しい博覧会だと考えたほうが当たっているのかなと思います。

藤岡　そうですね。博覧会というよりも、運動会と見ていただいたほうがいいかもしれません。運動会ではプログラムがあり、子どもや参加者がいろいろ楽しく演技しています。親御さんも少し参加してくださいよという感じかもしれませんね（笑い）。

携帯電話からもインパクトに入ることができる

青山　来年一年間のスケジュールというのは決まっているのですか。

藤岡　現在作成中です。というのは、それぞれのパビリオンがどういうバーチャル上の催しをやっていくか、また、リアルな会場も出てきますので、そういうものを組み合わせていって、番組編成みたいなことをしていくわけですが、今、選手がようやく登録されてきたところだからです。

十二月までにどこまでの番組編成ができるか――恐らく前半ぐらいまでしかできないと思います。後半はやりながら考えますと言いながら編成する、そういう感じになるでしょう（笑い）。

実は我々は、始まったところからが本番だと見ています。というのは、どんな姿になるかということが、想像したとおりになるかならないか、まだ分からないわけですから。実際に一月か二月ごろまで見て、これだったら面白そうだなとか、くだらないなとか判断しますよね。

私は一二〇％面白いものができると思っていますが、そこで皆さんが、じゃ、こういうふうに自分たちも参加しようじゃないかということを考えていただいて、本格的なプログラムができるのは、それからだと思います。

青山　出展者もこれから三か月の間に立ち上げなくちゃいけないわけですから、大変ですね。

入場したい方は、インパク広場へまずアクセスすることになるのですね。

藤岡　インパク広場にアクセスしていただくのが一番簡単でしょうし、それぞれのサイト、例えば企業のサイトですと、企業のサーバーの上にインパクの建物が建っています。ですから、「企業の名前／インパク」というところから入ることもできます。

青山　インパクには、携帯電話からも入れるのですか。

藤岡　はい。携帯電話から入るのも、一つのコンテンツをつくるということになりますから、それも皆さんにできるだけ対応するようにということでお願いしています。

モバイルを使ってどのように参加するか、片や、高速の光ファイバークラスのものを使えば何ができるかといった試みも含めて、いろいろなことをやってみようということです。

青山　コンピュータからも携帯電話からも、より多くの人たちにインパクに参加していただけるといいですね。これも二十一世紀の日本のインターネット社会をより幅広く展開していくための一つのステップだろうと思います。

ハード・ソフトの面とともにコンテンツが問われる時代に

青山　最後に、日本型のＩＴ社会の目指すものをお話しいただけますでしょうか。

藤岡　これからのＩＴ社会というのは、当然、電子政府の実現だとか高速通信の環境とか、そういうＩＴのハードとソフトの関係が重要なのはもちろんですが、その中に入れるコンテンツ、内容をどのようにするのかという問題も考えていかなければなりません。街に見立てると、道路とか鉄道とか電話線といったインフラのところと、道路にどんな店があるんですかというところと、両方ないとだめです。

インパクとの関連から言いますと、日本型のＩＴ社会というのは、結局、日本語の

ネットの社会で、どういう国際的に通用するコンテンツを持ち、どういう社会を形成し、世界に発信するかというところが大事です。ネット社会ですから、国際的に通用するためには、例えば英語で書けばいいというのではなく、英語で書いてもコンテンツがないと意味がないということです。内容がないものを英語に直しても意味がないわけで、内容のあるものをきちんと自分の言葉でネットの中で表現できる社会をどうつくるかということだと思います。

インパクのような試みは、コンテンツをみんなが参加してつくりましょうということを言っているわけで、単に今のネットの舞台で先行している人がいいというのではなくて、これからまさに文化とかいろいろな側面を持っている人たちがネットの社会でいかに交流し活躍できるかという場をどうつくっていくかということが重要です。逆に、そういう人たちを排除したら、ネットの社会というのは全く意味がなくなって発展がなく、面白くなくなってしまいます。

日本から世界に向けて情報発信 ── インパクは国境を越えて世界の人たちが楽しめる、世界で初めてのインターネット博覧会

そういう意味で、様々な人々の交流を伴いながらのコンテンツづくりというのが我が国の社会、我が国の国民にとっていかに大切なものかといったところがどこまで認識されるかによって、我が国のＩＴ社会というのは変わってくると思います。この辺のところを一番よく認識しているのは、フランスをはじめとするヨーロッパ諸国だと思います。その辺、日本はちょっとアメリカに寄り過ぎているように思いますね。

青山　日本の中で、私たち一人一人がインターネットをいかにかみ砕いていくかということでしょうか。

藤岡　ネット社会をどうかみ砕いていくかということだと思いますね。ネット社会というのは、相手も見えませんし、どちらかというとオタク的な人たちのほうが多いと今、言われがちですが、例えば我が国に外国の人が大勢来たときに、どのように外国の人とコミュニケーションするのかという文化は、アメリカのほうがはるかに進んでいるわけです。そういう文化を我々が学ばなければいけないのと同様に、ネット社会でどのように人と付き合っていくか、どういう社会をつくるのかというのが、これから非常に大事だと思います。

青山　インパクはまさにこれからつくり上げていくということで、事務局の皆さん方、さぞ大変なことも多いかと思いますけれども、ぜひインパクが成功しますように、私たちも少しでも参加できればと思います。

藤岡　ぜひとも参加してください。参加自体がまさにご支援なわけで、ご参加いただいてこそインパクに価値があるというものです。よろしくお願いしたいと思います。

青山　日本の政府もこれからＩＴに重点を置くとおっしゃっていますから、このインパクが一つの飛躍のきっかけになればと願っておられるわけですね。

藤岡　本当に切に願っています。インターネットというのは、まさに社会が生き残るための文化力が試されるところだとも思っています。

青山　どうもありがとうございました。

（このインタビューは十月十日に行われました）